



言語は、社会と文化の文脈が埋め込まれた存在
言語を身につけることは、世界を見る見方を身につけること

言語は、集団を分かち要因にも 対話する橋にもなる

誰もが知っているように、人間は言語によって考え、言語を通じて他者とコミュニケーションしています。この特質は人類に共通のものですが、身の回りにある言語と人間との関わり方は、決して一樣なものではありません。例えば、私たち日本人にとって、日本語はいわば空気のような存在。日本語を使用していると、ことさら意識する人はまずいないことでしょう。ところが、他の国々や地域を見ると、言葉の問題が大きな社会問題になっている例は決して少なくありません。それどころか、それがエスカレートし、民族間の対立に至っている事例は現在でも地球上に多々見られるのです。だからといって、多言語イコール集団同士の対立の要因という見方は、あまりにも皮相といわざるを得ません。言語は、集団を分け隔てる要素になると同時に、対話をする橋にもなりえます。ある言語を身につけるということは、世界を見る見方を身につけることであり、感情をあらわす仕組みを身につけるということなのです。

実際、人類の歴史をみても、また21世紀の世界においても、言語は中立的なコミュニケーションの道具に止まっていたためしはありません。本誌前号で、本研究科の恒川先生が「二流とみなされた混成語、クレオール」について語っておられたように、言語はさまざまな方向から社会的価値づけの対象となり、ひいては独自の社会的力を行使するに至ります。言語は、社会的・文化的文脈を埋め込んで形成されたもの。言語の外にある「不純な」要素が介入することで社会的要因が言語に「反映」するのではなく、言語そのもののなかにさまざまな社会的な力が内在し、それらが多様な形態を取るといえます。

わからない不安 わかった気になる危険

私たちが普段何気なく使っている「日本語」という言葉は、実は明治時代に誕生した言葉です。こうした「〇〇語」という概念一つをとっても、突き詰めていけば国家のあり方や地域文化の位相などさまざまなものが見えてきます。言語を通して、国家の構造を解くこともできるわけですから、ここにも言語社会学という言語と社会の関わりを探求する学問の面白さがあると思います。

日本はよく単一民族・単一言語の国と思われていますが、実際にはちがいます。この現実と意識のズレが、マイノリティの問題や言語政策などに疎いという実態を招いているといえるでしょう。加盟国の数だけ公用語を増やすというEUは極端な例としても、グローバル化が進み多種多様な国や地域の人びとが日本で生活するのが当たり前になるこれからの時代、私たちは言語政策や言語権（伝承言語を身につける権利）等の問題をもっと真剣に考える必要があると思います。例えば、言語権にも関わる問題として、ブラジルからの移民の子どもたちがポルトガル語を話せなくなっているといった現実があります。言語は放っておけば身につくというのではなく、教育等を通じて育てる環境が必要ということです。

言葉の通じない人と接したとき、人間は不安になりがちなもの。また、違う言語的背景をもつ人を自分の「常識」で判断してしまうこともあります。どちらもままあることですが、ここで大事なのはそういう自分をしっかりと見つめること。不安に思う自分に「なぜ」と問ひかけ、無意識にもっている常識を問い直すことが、他者を理解する力を育てていくのです。一番難しいのは、何がわからないかを知ることであり、そこへのアプローチはどこまでわかっているかを知ることから始まるからです。言語も社会も、固定されたものではありません。刻一刻と変化するそのダイナミズムに分け入り、探求していく活力は、自らを問い直す力、見直す力に宿っていると私は思っています。

最後に、言語社会研究科について簡単にご紹介しておきましょう。当研究科の特徴の一つは、修士課程で卒業して社会人への道をめざす学生が多いことです。このため、言語と社会の関係に関する知識の探求に加えて、文献調査やレポート・論文作成、プレゼンテーションなど社会で役立つスキルの実践にも力を入れています。もう一つの特徴は、国内外を問わず他大学の出身者と留学生が多いこと。日本語教育をやりたい、言語政策を研究したい等々、各人がやりたいというテーマをとことん追求できる自由な環境も、当研究科の大きな魅力である特徴だと自負しています。(談)

